

“It 分裂文”の既成事実効果・個人的責任回避機能

湯本 久美子

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

キーワード: It 分裂文・既成事実効果・個人的責任回避機能・It の指示領域・

A generalized conceptualizer・Impersonal It 文

要旨

本論は、It 分裂文の特徴の一つと言われている「既成事実効果」と「個人的責任回避機能」— that 節で述べられていることが他の人には既に知られた事実であり聞き手のみ知らなかったものとして情報が提示される効果と、そこから内容について話し手の個人的責任が回避される機能(Prince 1978:898-900) — について議論する。この効果と機能は、that 節の内容または It 分裂文全ての内容が聞き手にとり新情報である “Informative-presupposition It 分裂文” (e.g. “It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend.”) に見られ、この効果と機能を It 分裂文にもたらず要因の分析はこの構文の研究テーマの一つである。本論では、この問題を認知文法の枠組み(Langacker 2011)に基づき、概念化者の立ち位置という観点から分析する。その結果、It 分裂文の Impersonal *it* が指示的意味を持ち、そしてその指示領域に特定から不特定の幅があることが、概念化者の多様な姿の提示に関わっている可能性があることを示す。そして、It 分裂文は対話者間領域における「特定の概念化者」から世間一般の人々の一人としての「一般的概念化者」までの多様な概念化者の姿を聞き手に示すことができる連続体を持つという試案を示す。この「一般的概念化者」としての話し手の姿の提示が「既成事実効果」及び「個人的責任回避機能」に寄与していると考えられることを述べる。

1. はじめに

本論¹の目的は、It 分裂文(1-3)のタイプである Informative-presupposition It-clefts (2-3)の特徴の一つと言われている “a known-fact effect” (既成事実効果) そして “a responsibility-weakening function” (個人的責任回避機能) (Prince 1978:898-900) について、認知文法の枠組みに基づき、概念化者の姿という観点から説明を試みることである。

(1) Stressed focus It-clefts (SF It 分裂文) : ...So I learned to sew books. They're really good books. It's just the covers that are rotten.

Prince (1978:896) 下線 (=新情報) は筆者による

(2) Informative-presupposition It-clefts (IP It 分裂文) : (The leaders of the militant homophile

¹ 査読者より頂戴いたしました数々の貴重なご助言に対し、心より感謝申し上げます。

movement in America generally have been young people.) It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.

Prince (1978:898) 括弧及び下線 (=新情報) の付加は筆者による

- (3) Informative-presupposition It-clefts/Discontinuous clefts (IP It 分裂文) : It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. (On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one.) Prince (1978:898) 括弧及び下線 (=新情報) の付加は筆者による

It 分裂文の構成要素の呼び方は研究者により異なるが、本論では、It 分裂文の“*It*”で導かれている部分を“*It* 節”そして、“*that*”²で導かれている部分を“*that* 節”と呼ぶこととし、各々の節内で述べられている事柄を「内容」と表すこととする。これらの表記は便宜上のものである。

- (4) [*It*] [*was*] [*his keys*] [*that*] [*he lost*]. Prince (1978:883) 括弧は筆者による
It 節 that 節

It 分裂文の持つ既成事実効果そして個人的責任回避機能の研究は、Prince (1978)から始まっていると言えるだろう。Prince (1978)は、Wh-分裂文と It 分裂文は自然な談話状況において互換性はないと主張している論文であり、It 分裂文の *that* 節の内容の新旧情報に着目し、It 分裂文を以下に示すように、二種に分類している。Prince (1978)以前は、It 分裂文は、It 節で示される内容が“focus”、そして *that* 節で示される内容が“presupposition”であるとのみとらえられていたようである。例えば、(4)の“*his keys*”が“focus”そして、“*he lost*”が“presupposition”となる。

Prince (1978)の分類の一つ目は、It 節の内容が新情報かつ多くの場合対比的情報であり、*that* 節³に既知または旧情報、前提情報が置かれている分裂文(1)である。Prince (1978:896)は“stressed focus IT-clefts”と呼んでいる。上記の(1)そして(4)がこのタイプである。It 節の新情報、例えば(4)の“*It was his keys that he lost.*”では“focus”部分である“*his keys*”が相当するが、この“*his keys*”に強いストレスが置かれることからこのような名称が与えられている。本論では、以後このタイプの分裂文を「SF It 分裂文」と表記する。

二つ目は、*that* 節に新情報がある It 分裂文で、Prince (1978:898-903)は

² Prince (1978:883)に基づき、本論では“*It is/was Constituent, which/who(m)/that/φ Sentence minus Constituent*”の形をもつ構文を It 分裂文とし、“*the one, the thing*”を文頭に持つ分裂構文は扱わない。また、Prince(1978)は“*that-clause*”という用語で *that* 節を指しているが、文頭の *It* で始まる節については特定の用語は与えていない。

³ Prince (1978:896)は、“*In the stressed-focus it-cleft, the that-clause represents known or old information, which is not marked as assumed to be in the hearer’s consciousness and which is not the theme.*”と述べている。

“informative-presupposition IT-clefts”と呼んでいる。前出の SF It 分裂文では前提情報が置かれている that 節部分だが、このタイプの分裂文では that 節の情報は既知ではなく、新情報であり聞き手にとり知識を与えるものであることから、“informative-presupposition”という呼び方となっている。このタイプの分裂文の存在が Prince (1978)の主張の一つである。上記の(2)と(3)がこのタイプであり、以後、本論では、この種の分裂文を「IP It 分裂文」と表記する。

この(2)と(3)の IP It 分裂文には次の違いがある。(2)の場合は It 節で導かれた内容 “they”は既知情報であるが、(3)の場合は、that 節のみならず、It 節の内容も新情報であり、It 分裂文全てが聞き手にとり初めて聞く情報で構成されている。(3)は談話冒頭に用いられることが多く、このタイプを Declerck (1984)は “Discontinuous clefts”と呼び(2)と区別しており、“discourse opener”の働きがあると述べている⁴。

これら(2-3)の IP It 分裂文に見られるのが「既成事実効果」である。既成事実効果とは、that 節で述べられている内容が初出であるにも関わらず他の人には既に知られた事実であり聞き手のみ知らなかった情報として提示される効果 —“as a known fact, unknown only to the readership”(Prince 1978:898)、 “to mark a piece of information as fact, known to some people although not yet known to the intended hearer.” (Prince 1978:899-900)— のことである。そして、その情報に対する話し手の「個人的責任回避機能」 —“a responsibility-weakening function” (“reducing the speaker’s responsibility” Prince 1978:900)— をも持っていると言われている。Prince (1978)以降、これらに類似の働きを認めている研究者は少なくない (Borkin 1984:124, Collins 1991:167, Delin & Oberlander 1995:474/492-493, Lambrecht 1994:71/2001:484-5, Huddleston & Pullum 2002:1424)。

以来、この既成事実効果そして個人的責任回避機能が何からもたらされるのかが議論点の一つとなっている。なぜならば、既に述べたように、IP It 分裂文の that 節では新情報⁵が述べられている、さらに、“Discontinuous clefts”では It 節の内容も聞き手にとり新情報である。それなのに、なぜ「既成事実」として聞き手に受け止められる効果があるのか。そして SF IP 分裂文では話し手の主張が表現されているにも関わらず、IP It 分裂文にのみそれとは対照的な「個人的責任回避」がなぜ起こり得るのか。次節で示すように、様々な説明が提示されているが、未だ定説となるような強い仮説は見受けられないと思われる。

⁴ Prince (1978:904)は WH 分裂文と It 分裂文の違いを分析しており、結論として次のように述べている—“WH-clefts mark the information in the WH-clause as assumed/assumable to be in the hearer’s consciousness or GIVEN. ……It-clefts, however, are far more heterogeneous, but all types mark the information in *that*-clause as a known fact – or simply KNOWN.” この Prince (1978)の主張に対する反論が Declerck (1984) であり、WH 分裂文と It 分裂文は同じ3種の下位分類(Contrastive clefts, Unstressed-anaphoric-focus clefts, Discontinuous clefts)が可能であり、両者の基本的な意味と機能は等価である、分裂文タイプの選択にはトピック等の語用論的要因が関わっているだけであると主張している。3種の It 分裂文の一つが “Discontinuous clefts”であり、この特徴については “the focus NP has a greater potential for being a persistent topic.”(p.267)と、焦点化された名詞句は継続性を持つトピックとなる可能性が高いと述べている。

⁵ Prince (1978:898)は IP It 分裂文について次のように述べている。 “With these sentences, not only is the hearer not expected to be thinking about the information in the *that*-clause, but s/he is not expected even to know it.”

本論はこの既成事実効果と個人的責任回避機能の解明を It 分裂文の“*It*”に焦点をあてることにより試みるものである。分析の出発点は、Langacker (2011)である。Langacker (2011)は、It 分裂文と同じく“*It*”を持つ (5) (以後、本論ではこの構文を“*Impersonal It* 文”と呼ぶ) を取り上げて“*It*”の意味を議論し、そこから非人称構文の“*It*”が指示的でありかつ非人称構文は「一般的概念化者」を示す傾向があると主張している論文である (3.1 節で説明する)。

(5) *Impersonal It* 文: It is certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.
Langacker (2011:203)

本論では、It 分裂文の“*It*”の多様な指示領域(“*delimitation*”)が概念化者の様々な姿、立ち位置の提示の仕方に深く関係していると考えられることを述べる。指示的代名詞としての“*It*”は対話者間領域にある具体的な指示物を指示するケースから、対話者間領域を離れ一般的百科事典的知識領域における事柄、さらにはより抽象的な概念までの幅広い指示領域を持っている。これらの指示領域の異なりは、各々の領域における概念化者の異なった姿を示していると考えられるのではないだろうか。そこから、この“*It*”を持つ It 分裂文も様々な概念化者の立ち位置を示すことができると考えられ、この構文は概念化者の姿という点において“*the particular conceptualizer*”から “*a generalized conceptualizer*”の連続体を成しているという提案を行う。この連続体の仮説に基づき既成事実効果と個人的責任回避機能の説明を試みる。

Langacker (2011)では、今後の研究課題として *There* 構文と It 分裂文⁶が挙げられている。本論はこの Langacker の研究課題に対する取り組みであり、かつ、同じく *Impersonal It* 文を分析することにより“*It*”の意味を考察した湯本(2013)⁷の継続研究でもある。

本論の構成は次のとおりである。2 節では「既成事実効果」そして「個人的責任回避機能」に関する先行研究とそれに対する問題提起を行う。3 節では、概念化者の姿の提示の仕方という観点から分析を進める。3.1 節では Langacker (2011)による *Impersonal It* 文における“*It*”の分析を示し、3.2 節では *Impersonal It* 文と It 分裂文の関連性を示すことにより *Impersonal It* 文の分析結果を It 分裂文に援用することの妥当性を説明する。3.3 節では“*It*”の指示領域という観点から分析を行い、It 分裂文における概念化者の姿の連続体という仮説を提示し、その仮説に基づ

⁶ Langacker (2011:213-214)は “*It’s in April that we go to Japan.*” を挙げて、次のような見方を示している。“Here I suspect that it is more specific than just the relevant scope of awareness. I speculate that it designates an abstract ‘path of selection’, whereby one option is chosen from range of conceivable alternatives.” 一単に意識のスコープを指示するというより、より特定の働きを示しているのではないかと、“*It*”は抽象的な選択の経路を表し、それによって可能な選択肢の中から一つが選択されるのではないかという意見である。

⁷湯本(2013)では、Langacker (2011)が主張している *impersonal It* の意味の一つ “*a generalized conceptualizer*” の妥当性を *Impersonal It* 文の 2 種類の語彙的特徴を考察することにより示した。第一は、この文にのみ可能な不定詞を目的語にとる動詞の受動化に焦点を当てた。第二には、この文にのみ生起可能な動詞 “*seem, appear, be, chance, come about, fall out, happen, strike, transpire, turn out*” を取り上げた。これらの言語事象の分析から、*impersonal It* が指示的意味を持ち、“*a generalized conceptualizer*” を含意できることを述べた。

き「既成事実効果」と「個人的責任回避機能」を説明する。最後の4節では結論を述べる。

2. 先行研究：SF It 分裂文の影響・定性

IP It 分裂文はその that 節、または文全体に新情報を含んでいるにも関わらず、その情報をあたかも既に知られた事実であるかのように示す「既成事実効果」そして「個人的責任回避機能」を持っていると言われている。そして、これらの効果がどこからもたらされるのかが It 分裂文研究の一つのテーマとなっている。本節では、SF It 分裂文の影響(2.1 節)そして It 分裂文の持つ定性(2.2 節)からの説明を概観し、これらの説明だけでは十分ではないことを述べる(2.3 節)。

2.1 SF It 分裂文の影響

Prince (1978)は、IP It 分裂文に見られる既成事実効果が何からもたらされるのかについては明確に議論していない。しかし、Prince (1978:899-890)から、次のように考えているように思われる。SF It 分裂文では前提情報が that 節に置かれている。一方、IP It 分裂文ではその that 節に新情報が置かれている。そのことから that 節で示されている新情報があたかも前提であるかのようにとらえられ、既成事実効果が生まれていると見ているようである。

同じく、Lambrecht (1994:70-71)も、次のように述べ、類似の見方を示している。まず、It 分裂文の適切な使用には、関係節によって表現されている“proposition”が語用論的に前提とされていることが求められる。SF It 分裂文(6)では、話し手が何かを無くしていることを聞き手が知っているという前提があり、話し手はそれが鍵だと主張しており、従って、適切である。

(6) It's my key that I lost. Lambrecht (1994:70)

しかし、(7)の IP It 分裂文は講義の冒頭文であり、この場合には who 節で表現されている陳述は聞き手に知られた事実ではないだろうし、講師も聞き手がこのことを知っているとは思ってはいないであろう。それにも関わらず、発話者である講師は聞き手が前提に順応する意志があると期待している。

(7) It was George Orwell who said that the best books are those which tell you what you already know. Lambrecht (1994:71)

(7)のこの効果は慣習化からもたらされたものであり、前提を必要とする SF It 分裂文の形式を用いて共有されていない情報を提示することにより、その表現自体を前提と解釈するように仕向け、また聞き手もそのように捉えていると説明している。

Example (2.21)[本論の(7)] is not necessarily interpreted by the audience as an invitation to act

as if the proposition expressed in the *that*-clause were pragmatically presupposed in the strict sense. Rather it can be seen as a conventionally established indirect way of communicating the content of that proposition.However, given their formal similarity, it is important to emphasize the relatedness of the two types. Lambrecht (1994:71) 下線は筆者による

そして Lambrecht (1994:71)は、SF It 分裂文と IP It 分裂文には関連性があり、その関連性をもたらすものは、*that*-clause によって “grammatically marked”されている “factual and non-asserted”であるとしている。

Indeed, in all instances of *it*-clefts, the proposition in *that*-clause is GRAMMATICALLY MARKED as factual and non-asserted. In what I take to be the original case, the proposition of *that*-clause is assumed to belong to the common ground between the interlocutors; in the second case it belongs to the common ground between the speaker and some third party, and the addressee just happens not yet to be included in this party. The common syntax and the overlap in presuppositional structure between the two types make it possible, I believe, to interpret the second type as an extension of the first via conventionalized pragmatic accommodation. Lambrecht (1994:71)下線は筆者による

この SF It 分裂文の影響という説明方法は、Patten (2012:Chapter 7 Section 5)による It 分裂文の歴史的変化と一致している。Patten (2012)は、この構文は元来 “discourse-old information” (談話旧情報) を表現するものであったと述べている(p.204)。中期英語コーパスでは *that* 節に前出談話にはない情報が現れている 2 例が確認されているが(p.205)、中期英語後期までは IP It 分裂文は出現していない(p.205)。早期近代英語期(1555 年)になると、*that* 節の “discourse-new” (談話新) 情報を “as a previously established fact” (既に確立されている事実) として述べている文が 3 例現れている(p.206)。そして早期近代英語期の終わり(1696 年)には “performative function”を持つ文が登場している(p.206)。1837 年のチャールズ・ディケンズの小説 *Pickwick Papers* では *that* 節に新情報また予期していない情報が見られ、それは “it no longer depicts a controversial reaction but almost a shared experience” (論議の的とはなっておらずあたかもほぼ共有の経験) として描写されていると Patten は説明している(p.208)。

そして 1913 年の下記の文(8)について Patten (2012:209)は “Although the fact that *commercial cultivators gave serious attention to the Japanese flora* may be new to the reader, it is presented as a commonplace occurrence.”と説明している。栽培者が日本の植物に注目したという *that* 節の内容は読み手には新情報ではあるが、それをごく当たり前のことがらのように示しているのである。

- (8) *Although the introduction of the beautiful Japanese plants that now contribute to the charm of British gardens belongs to the distant past, it was not until some fifty years ago that commercial cultivators gave serious attention to the Japanese flora, with a*

view to obtain⁸ some other of its members for the further enrichment of our gardens.
(WEATHERS-1913,1,13.288) Patten (2012:209) 下線は筆者による

それ以後については、行為遂行的分裂文が増えていると述べ、“Performative *it*-clefts therefore function as a politeness strategy, enabling the speaker to distance themselves from their act (marked as presupposed or ‘not at issue’) by focusing on their emotional response, either to the act itself or to the addressee.”(p.209)と説明している。行為遂行的 It 分裂文がある種のポライトネス方策として用いられるようになってきている。

従って、Prince(1978)そして Lambrecht (1994)の主張 —IP It 分裂文は SF It 分裂文の影響を受けている— という考え方は、Patten (2012)の調査に基づくと歴史的に妥当であると言えるかもしれない。

2.2 “the”の異形態である “It”による定効果

It 分裂文は、value-variable (値と変数) 関係を示しており、値を特定化/指定する意味 —specificational meaning (identifying meaning)—を持っているという捉え方がある(Declerck 1988:183)。例えば、Huddleston and Pullum (2002:1415-1416) は、分裂文を背景要素と前景要素に分け、背景要素は前提要素を、そして前景要素は変項の値を示すものとしている(Foregrounded element as the expression of the value of a variable)。例えば、(9)の場合では、背景要素である「Sueが誰かと結婚した」という開放命題の変項部分である「誰か」を埋める値が前景要素で表されている「Tom」ということになる。この性質は It 分裂文(9)に否定をかけた場合にも、(10)のように前提「Sueが誰かと結婚した」が維持されることから確認できる。通常文(11)の否定文(12)にはそのような前提の維持は見られない。

- | | |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| (9) It was Tom that Sue married. | Huddleston and Pullum (2002:1415) |
| (10) It wasn't Tom that Sue married. | Huddleston and Pullum (2002:1415) |
| (11) Sue married Tom. | Huddleston and Pullum (2002:1415) |
| (12) Sue didn't marry Tom. | Huddleston and Pullum (2002:1415) |

上述の性質から、It 分裂文は指定文であるという見方がある。指定文ということから、変項の値として指定される要素は「定性質」(definition)を持つと考えられ⁹、この「定性質」が既成事

⁸ “to obtain”は原文のまま

⁹ Patten (2012:34-35)は “specificational”の定性について次のように説明している。下記の(1)と(2)の文は両方とも “predicational”である。不定冠詞が使われている(1)は指示物である John を “a member of the set of *surgeons*”とカテゴリー化し、定冠詞が使われている(2)は “the best surgeon”が John の特質であることを表している。

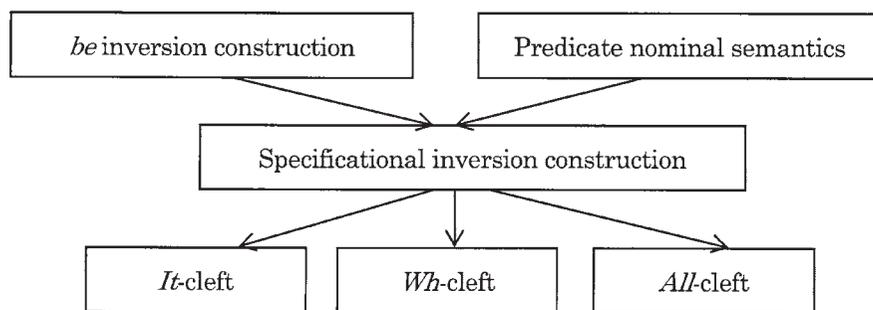
(1) John is a surgeon.	[predicational]	Patten (2012:35)
(2) John is the best surgeon.	[predicational]	Patten (2012:35)

しかし、(2)は別な解釈も可能である。John が焦点化されている場合(4)には、この文は “a specificational

実効果に寄与しているという意見がある。そこからこの「定性質」が分裂文のどの要素からもたらされているのかの解明が重要となっている。以下に3種の分析の概要を示す。

まず、構文文法の枠組みで分析している Patten (2012)は、It 分裂文を図1で示している指定構文(specificational constructions)の一つとして捉えている。図1の“Specificational inversion”とは(13)の形式を指す。

I view the *it*-cleft foremost as a member of the family of specificational copular constructions. *It*-clefts, *wh*-clefts, *the*-clefts, *all*-clefts and certain noncleft copular sentences all inherit properties from a more general, schematic, specificational copular construction. Patten (2012:10)



Incorporating the *it*-cleft into a family of specificational constructions

図1 Patten (2012:74 Figure 7)

(13) The thoracic surgeon is John. [specificational inversion] Patten (2012:80)

そして、Patten (2012:11)は “I analyse the sentence-final clause as restrictive relative, modifying the initial *it*. *it* and relative clause together operate like a discontinuous definite description.” と述べ、“discontinuous constituent analysis” (p.72)に基づく制限関係節を提唱している。

この Patten (2012:72)の主張は次のように展開されている。

(14) It was Frank that complained. Patten (2012:72) 下線は筆者による(原文は太字)

(15) The one that complained was Frank. Patten (2012:72) 下線は筆者による(原文は太字)

reading”が可能であり、そこでは “John is identified as matching the description *the best surgeon*” という解釈となる。それは(2)が “the complete membership of the set *best surgeon*” を表していることによる。しかし、(1)は例え、John が焦点化されていても(3)、この文は John の特質を述べているだけであり、そのような解釈はない。なぜならば、(1)は “a member of the set of surgeons” とのみ記述しているからである。

(3) JOHN is a surgeon. [predicational] Patten (2012:35)
 (4) JOHN is the best surgeon. [specificational] Patten (2012:35)

まず、(14)の It 分裂文は “a specificational NP *be* NP sentence”である (15)の “*it*-分裂文”¹⁰に縮約することができる。(15)は、(14)の *that* 節がその外置された位置にもかかわらず It を制限的に修飾している、つまり、*that* 節と It は制限関係節を成していることを示している。制限関係節であることから定性が認められる。この定性が“*It*”によって discontinuous NP にもたらされており、それは“*It*”が他の人称代名詞と同じように定性を持っていることによると説明している。そして It と *that* 節が共に “a definite NP predicate”として機能していると主張している。

In Chapter 3, I advanced an analysis of specificational copular sentences as involving nominal predication and showed that definiteness is an important concept in the creation of specificational meaning. Since *it*-clefts are specificational copular constructions, it follows that they too should contain a nominal, predicative element which will likely exhibit some of the characteristics associated with definiteness. This suggests a “discontinuous constituent” analysis of the *it*-cleft, on which the cleft pronoun and the cleft clause function together as a definite NP predicate
Patten (2012:82)

次に、ミニマリストの枠組みで分析している Hedberg (2000)¹¹も、Patten (2012)と同じく、“discontinuous constituent analysis”の手法を用いている。主要部 “*It*”は離れている “*wh*-句”(complementizer phrase)を補部にとる定名詞句(determiner phrase)であると仮定し、“the subject pronoun in a cleft sentence together with the cleft clause is shown to function pragmatically as a discontinuous definite description.” (p.891)と述べている。It と *that* 節は共に語用論的に一つの定記述機能を持つ一つの単位を成していることになる。そして、“*It* functions as an allomorph of *the*, and cleft clauses pattern like the nominal content of definite descriptions” (p.903)と述べており、分裂文の “*It*”は定冠詞 “*the*”の異形態(allomorph)であると考えている。

“*It*”の定性質については、Gundel et al. (1993)の Givenness Hierarchy (既知性階層) (表 1) に基づいて説明している。この階層のそれぞれは該当する指示語を使うときの必要十分条件、そしてそれぞれの地位は右側の地位の全てを含意している。例えば、“*it*”は “in focus”のみならず、それより右側の全ての既知性をも含み得るものである。

表 1 Gundel et al. (1993:275 Table (1)) The Givenness Hierarchy

(6) in focus >	(5) Activated >	(4) Familiar >	(3) uniquely identifiable >	(2) referential >	(1) type identifiable
it	that this this N	that N	the N	indefinite this N	a N

¹⁰ “*it*-分裂文”とは “The one that.....”または “The thing that....”の形式の構文を指している。

¹¹ Hedberg (2000:892)は、“*It*”を主語とする全ての非人称構文の “*It*”が指示的であるとは考えていない。“It seems to me that you’re wrong.”の “*It*”は “meaningless pleonasm” (意味を持たない、冗語)であり、一方、“It’s not true.”の “*It*”は “meaningful status of full referential pronoun” (指示的意味を持つ代名詞)としている。It 分裂文の “*It*”については “Ex. 2c shows the cleft *it*, whose referential status I am calling into question”と述べ、It 分裂文の “*It*”には疑問の余地があると述べてから分析をはじめている。

そして Hedberg (2000)は It 分裂文の “It”を “the”の異形態としていることから、“It”は “uniquely identifiable”—聞き手はその名詞のみで話者が意図する指示物を唯一同定することができるものを指示していることになる。従って、同定できる条件には “previous familiarity” (談話前出による既知性) によるという必然性はない。例えば、下記の新聞冒頭に用いられている It 分裂文(16)について “informative presupposition *it*-clefts are analogous to definite descriptions whose referent is uniquely identifiable but not yet familiar.” (p.903)と述べ、“It”が談話前出による既知性を示さずと唯一同定性を指しえる “the”の異形態ということから IP It 分裂文の既成事実効果は説明できるとしている。

(16) [Beginning of a newspaper article] It {#This/#That} was just about 50 years that Henry Ford gave us the weekend. On September 25, 1926, in a somewhat shocking move for that time, he decided to establish a 40-hour work week, giving his employees two days off instead of one. (Philadelphia Bulletin, cited in Prince 1978)

Hedberg (2000:902)

Gundel, Hedberg & Zacharski (2001:4 節)¹²も Hedberg (2000)と同様の見解を示しており、It 分裂文の定性質は “uniquely identifiable” であると考えている。様々な先行研究を分析した結果、that 節の内容の多くが聞き手にとり既知情報ではなく、定冠詞と同じ “uniquely identifiable” と解釈すべきであると述べている。

.....the large proportion of the cleft clauses that are nonfamiliar (49-72%) supports the argument against an analysis that treats them as exceptional cases to be handled by the mechanism of accommodation. An analysis of the cleft pronoun + cleft clause as a uniquely identifiable definite description captures the similarity between definite article phrases and cleft sentences.
Gundel, Hedberg & Zacharski (2001:292)

これらの “discontinuous constituent analysis”¹³によるアプローチは、It 分裂文の持つ定性

¹² この論文は “Givenness Hierarchy”の枠組みで、英語の定冠詞を分析しているものである。定冠詞は an NP の指示物が聞き手にとり “familiar” であるということを示すと一般に考えられているが、全ての定冠詞句がこの “familiarity requirement” を満たしてはならず、定冠詞の意味は “uniquely identifiable” であると主張している。3種の Canadian Parliament transcripts を分析した結果、321の定冠詞名詞の内、140が “were nonfamiliar in the sense that the hearer/reader could be expected to have an existing representation in memory (‘hearer-old’ in Prince’s (1992) terms).” と述べており、聞き手の記憶の中にあるという意味での “familiar” 性質を示していないことがその根拠となっている。

¹³ Patten (2012)、Hedberg (2000)そして、Gundel, Hedberg & Zacharski (2001)のように、It と that 節を定性質を表す一つの単位と見ていく研究はめずらしいものではないようである。Gundel (1977:543)は、It は “a pronominal reference to the topic of the sentence” であり、“a right-dislocated NP” (右方転移されている名詞句) が指示しているのと同じ意味において代名詞的コピーであるとしている。つまり右方転移文 “I don’t LIKE them, those beans.” は It 分裂文 “It’s those BEANS that I don’t like.” と同じで、It は文のトピックである “those beans” を指示している。また、Borkin (1984:120)は分裂文の “the introductory *it*” は指示的で、しかし、この指示の意図された性質は relative-like 従属節によって特徴づけられるものでそれは “somewhat distantly follow” と述べている。

質は“the”に相当する“uniquely identifiable”一談話前出による既知性は無くとも、話し手は聞き手がその指示物を唯一同定可能であると考えて提示していることとしており、既成事実効果はそこからもたらされるものであると考えられている。

2.3 問題提起

2.1節では、that節に前提情報を持つSF It分裂文の影響からIP It分裂文のthat節が伝えている新情報もあたかも既成事実と解釈されるようになったという見方を示した。さらに、2.2節では、既成事実効果はIt分裂文のItとthat節が制限関係節を成し、そこから定性質がもたらされるといふ考えがあることを述べた。

しかしながら、SF It分裂文の影響と定性質というIt分裂文に共通していると考えられる特徴だけでは、なぜIP It分裂文のみがSF It分裂文とは異なり「既成事実効果」そして「個人的責任回避機能」を持ち得るのかという違いを説明することができない。特に、次の3点で不十分であると思われる。

第一に、SF It分裂文で伝えられる話し手の事実の「主張」、つまり新規に事実を示していることと、IP It分裂文で表されている事実を「既成」として示していることとの違いを説明することができない。

第二に、Gundel, Hedberg & Zacharski (2001)らは、Gundel et al. (1993)の Givenness Hierarchyに基づき、It分裂文が持つ定冠詞“the”相当の定性質から既成事実効果を説明している。しかし、この既知階層性は基本的には特定の話し手と特定の聞き手の二者間の談話における事柄の認知状態を説明しているもの¹⁴であり、講演会の聴衆のような不定の聞き手は分析の主な対象になっていないと思われる。定冠詞“the”は談話前出による既知性を必ずしも必要とせず、聞き手が唯一同定可能なものと話し手が思っている実体ならば指示できると筆者も考える。しかし、そのみで唯一同定可能な指示物は限られており、多くの場合、話し手と聞き手との関係が既に確立され談話が進行している状況や、唯一同定可能性を支えるフレームが必要である。しかし講演冒頭に使われるIP It分裂文にはそのようなフレームによる支えは薄く、また話し手には聞き手についての知識も無い。それなのに、何故、唯一同定可能となるのか、この点については何も説明されていない。

第三に、話し手がある事柄を事実であると同定した場合には、話し手はその事実同定責任を負うことになり、話し手個人の責任を回避することはできない。しかし、IP It分裂文が用いられる状況について Prince (1978:900) は、“Thus they [IP It分裂文を指す] are frequent in historical narrative, or wherever the speaker does not wish to take personal responsibility for the truth or originality of the statement being made.”と述べている。つまり、IP It分

¹⁴ Gundel et al. (1993:7 節 Conclusion)において、“We have proposed that six implicationally related cognitive status are relevant for describing speaker’s ability to appropriately use and interpret different forms of reference in natural language discourse.”(p.303)と述べていることから、想定されている話し手と聞き手の関係は一對一の自然な談話におけるものであると推測され、講演会の聴衆のような聞き手の認知状態は分析の主な対象とはされていないものと思われる。

裂文は、歴史的物語や、話し手がその陳述についての真偽や創意性に個人的責任を負いたくない場合に多く使われている。そして、Prince (1978:898-900)は、IP It 分裂文は話し手の責任を弱める “hedges”の働きを持つことから下記(17,18)のような説得を試みる談話に適しているとも述べている。この個人的責任回避機能は SF It 分裂文の影響と定性質のみでは説明できない。

(17) It is through these conquests that the peasantry became absorbed into a single form of dependent lord-tenant relationship. Prince (1978:900)

(18) It is chiefly for the sake of this super-sense, for the sake of complete consistency, that it is necessary for totalitarianism to destroy every trace of what we commonly call human dignity.

Prince (1978:900)

本論は、That 節に前提情報を持つ SF It 分裂文からの影響による IP It 分裂文の慣習化という見方を否定するものではない。なぜならば、IP It 分裂文が SF It 分裂文から発達し慣習化されていくことにより既成事実効果を示すようになり、遂行的発話へと変化していっているとすると考え方は、慣習化そして定着を重視している認知文法の考え方も一致し、妥当であると考えられる。そして It 分裂文が持つ定性質の可能性、そしてその効果も否定するものではない¹⁵。定性質について Langacker (2007:175)は “The basic import of definiteness is that, in the current discourse state, the content of the grounded nominal is itself sufficient to identify the intended referent.” (下線は筆者による)と述べている。従って、前節で指摘されているように、It 分裂文が定性質を持っているとすれば、その定性質が「事実効果」に貢献しているとする見方もまた認知文法のスタンスと異なるものではない。

さらに、Langacker (2005:102)が “Constructions are linked in networks of inheritance”

¹⁵この点に関連して、(1-2)が示すように It 分裂文には過去形を好むという傾向があると述べている研究がある。

(1) A: Where will she go? 安井 (編) (1987:492)

B: *It is to Canada that she will go.

(2) A: Where did she go? 安井 (編) (1987:492)

B: It was to her grandparents that she went.

この過去形を好む特徴について、安井 (編) (1987:492)は「(8a)[本論上記の(1)]の場合は、先行文がこれからのことを表しており、定とは考えられないので it 分裂文は用いられない。他方、(8b)[本論上記の(2)]のように過去形になると指し示すものが定として捉えられ、it 分裂文がもちいられうることを示している。」と述べており、定性質からの説明を示している。

一方、下記の現在形(3)と過去形(4)の容認度の違いについて、Borkin(1984:125)は情報構造に着目した説明を示している。It 分裂文の It 節が焦点部分であり、伝達重要性の高い情報が来る場合に適切となる。(3)は、著者がこの本について評価をしている最中であり、読み手が本の内容より本自体を情報的に捉えるのは考えられず、従って非文である。一方(4)の場合には、分裂節の伝達内容よりも It 節の “this volume” を歴史的な出来事として評価しておりそれを特定することが重要であることから容認度が高い、と述べている。

(3) *It is in this volume that the nine anthropologist-archeologists present a nutritious blend of provocative approaches to method and striking specific results. [Compare *In this volume, nine...*]

Borkin (1984:125)

(4) It was in this volume that B.J. Smith first introduced a theory of universal packaging that was to influence the packaging world for several decades.

Borkin (1984:125)

と述べているように、認知文法では、各々の要素のスキーマは頻度そして定着性の度合いを反映した意味ネットワークを持っており、そのネットワークが構文スキーマそして構文ネットワークと交差しているのが構文であると考えている。従って、IP It 分裂文の構文スキーマが複数の要因によって構成され、この構文の当該の特徴も複数の要因によってもたらされていると見るのは十分妥当であると考えられる。

しかしながら、すでに述べたように SF It 分裂文の影響そして定性のみでは IP It 分裂文の「既成事実効果」そして「個人的責任回避機能」に直結せず、両者を繋ぐ何かがあるはずである。次節では“the”の異形態としての“it”ではなく、“it”^{16/17}そのものの意味を考察することにより、It 分裂文が表すことができる概念化者の立ち位置を検討する。そのことにより、「既成事実効果」と「個人的責任回避機能」を考える。

3. It 分裂文の概念化者

「話し手のみならず『他の皆も』それを事実と見なしており、話し手はその一人である」として事柄が聞き手に示されれば、IP It 分裂文の持つ「既成事実効果」のみならず「個人的責任回避機能」をも説明できることになる。この点に着目している意見がある。例えば、Delin (1992) 及び Delin and Oberlander(1995)は、伝達されている情報の元々の発信元が話し手ではないことを示すことによって話し手の責任が回避されると述べている。しかし、なぜそれが可能なのかについては説明していない。

.....a speaker who uses an *it*-cleft that conveys new information in the complement is indicating that the information being communicated did not originate with the speaker, and while they may believe it themselves at the time of utterance, ultimate responsibility for the truth of the information rests elsewhere.
Delin and Oberlander(1995:474)

同じく、Lambrecht (1994:71)は、SF It 分裂文と IP It 分裂文に共通する *that*-clause は SF It 分裂文においては対話者間の“common ground”（共通領域）に属し、IP It 分裂文の場合にはその“common ground”は話し手と第三者に属しており、聞き手はたまたま未だその第三者に含まれていないだけであると説明している。この *that*-clause の違いについて、Lambrecht

¹⁶ Langacker (2007:177)は定冠詞と“it”の違いについて次のように述べている。“And because the specifications of *it*, for example, are more schematic than those of *the cat*, a higher degree of contextual salience is required than with the definite article.”

¹⁷ “it”の意味から It 分裂文を考察するアプローチは一般的とは言えないであろう。例えば、Quirk et al. (1985:348-349)は Impersonal *It* を ‘Prop *it*’と呼び、時間・距離・環境的状况表現を表す ‘empty’または ‘prop’ 主語として用いられると述べている。そして本論が取り上げている分裂文における ‘it’については次のように述べ、さらに意味が希薄であるとみている。“This ‘PROP *it*’, if it has any meaning at all, refers quite generally to the time or place of the event or state in question. Even less meaning can be claimed for the *it* which occurs as an anticipatory subject in cleft sentences (cf 18.25ff) or in clauses with extraposition (cf 18.33ff), as in [1-3].”

(1) Isn't <i>it</i> a shame <i>that they lost the game?</i>	[1]	Quirk et al. (1985:349)
(2) <i>It</i> must have been here <i>that I first met her.</i>	[2]	Quirk et al. (1985:349)
(3) I take <i>it</i> then <i>that you're resigning.</i>	[3]	Quirk et al. (1985:349)

(2001:484-485)では、SF It 分裂文と IP It 分裂文を分けるものは “knowledge of grammar” ではなく、“IP status”は “real-world knowledge”への依存程度によるものであると述べている。そして、慣習化された IP It 分裂文は既知前提を “rhetorical purposes”の為に活用したものであると述べている。しかし、「修辞的技巧」として整理しているにとどまっており、なぜ “common ground”に違いが生まれるのか、そして実世界についての知識の依存度とは何かについては何も説明されていない。

Lambrecht(1994/2001)そして Delin (1992)及び Delin and Oberlander(1995)の意見を認知文法の立場から捉えなおすと、It 分裂文の領域、そしてそこにいる概念化者の立ち位置が SF It 分裂文と IP It 分裂文では異なって示されていることになる。本節では、何故そのような異なりがもたらされるのかについて “It”の意味から追求し、It 分裂文には概念化者の姿の示し方において連続体が見られるという試案を示す。

3.1 では Langacker (2011)による Impersonal It 文の分析から、非人称構文の “It”は一般的概念化者を示しうることを述べる。3.2 では Impersonal It 文と It 分裂文の関連性について述べ、It 分裂文の “It”も一般的概念化者を提示できる可能性を示す。3.3 では It 分裂文の概念化者の姿を “It”の指示性の領域という観点から分析し、It 分裂文の概念化者の姿の連続体という仮説を提示する。

3.1 Langacker (2011)による Impersonal It 文分析: Impersonal /t が示す一般的概念化者

Langacker(1991(II):365) 他は、“It”には意味があり指示的であるという Bolinger の主張 (ボリンジャー(1981:第 4 章)を一貫して支持している。Langacker (2007:180)では “It”に関する Bolinger の特徴づけをこれ以上改訂する必要はないと述べた上で、特定の対象を指示する代名詞である “It”がどのようにして最大限に不特定の指示性を持ちえるのかという問題提起をしており、この問題を解く鍵は「非境界性」と「曖昧性」にあるとする見通しを示している。そしてこの問題と取り組んでいる論文が Langacker (2011)であり、そこでは “Impersonal It 文”(下記の例文 5 の構文を指す)について、①関連構文との比較、②他の代名詞との比較、そして③ “The control cycle”という基本認知モデルの 3 方向¹⁸からの分析を重ね合わせて、文冒頭の “It”の意味を説明している。

その中で、本論では、下記引用下線部分の非人称構文は “a generalized conceptualizer”、一般的概念化者を示す傾向があるという Langacker (2011:207)の意見に注目したい。

I thus propose, as a general characterization, the impersonal *it* profiles the relevant field, i.e. the conceptualizer's scope of awareness for the issue at hand. The conceptualizer may be identified as the speaker or some other specific individual, but – not surprisingly for impersonal constructions – it tends to

¹⁸ Langacker (2011): ①に関しては焦点の交替現象を取り上げている。例えば、動作主の焦点・非焦点に関しては能動文と受動文及び他動詞文と自動詞文、参加者の焦点・非焦点に関しては場所主語文(e.g. “The garden is swarming with bees.”)等が挙げられている。②については 3.3 節でその一例を示す。③このモデルについては本節内で概略を後述する。

be a generalized conceptualizer. What constitutes the relevant field varies with purpose and level of experience (e.g. physical, perceptual, social, epistemic), and while *it* evokes the field as an undifferentiated whole, certain facets of it may stand out as being especially relevant or most centrally and directly involved in the relationship profiled by the clause. Such entities offer themselves as specific interpretations for the referent of *it*. I suspect, however, the most schematic value predominates, such that *it* is maximally vague in reference. Imposing no delimitation on the field, in effect its referent is coextensive with it, or at least non-distinct. Langacker (2011:207) 下線は筆者による

Langacker (2011:203)は話し手を主語とする文(19)と Impersonal It 文(5)を比べて次のように述べている。

(19) I am certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

Langacker (2011:203)

(5) It is certain that formalists will someday discover the meaningfulness of grammar.

Langacker (2011:203)

(19)は “I”を主語に選択することにより、認識的判断の責任が話し手にあることをハイライトしている。一方、(5)は Impersonal *it* を使うことにより、話し手はスポットライトを避け、責任は特定されていない状況にシフトされ、そこではどの概念化者も同じ評価に到達するであろうとされている。そして、(5)の“a generalized conceptualizer”としての話し手の立場について次のように説明している。

While it is true that the speaker retains ultimate responsibility, and could not plausibly deny the validity of the proposition said to be *certain*, the speaker’s role is nonetheless defocused. The speaker remains offstage, only by implication subscribing to the view claimed to be evident to anyone who might consider the matter.

Langacker (2011:203)

この主張の根拠の一つは命題を認識的コントロール¹⁹する段階において特定のな認識者と一般的な認識者の二つの言語化が可能ながあることである。下記の例文(20-23)は Impersonal It 文に用いられる述語の中には “to 句”を付加することにより概念化者を特定することを許すものがあるということを示している。

(20) **Formulation**: It is {conceivable / plausible / *possible / *feasible / *imaginable} to me that we could do it without getting caught. Langacker (2011:202)

¹⁹ Langacker (2011:198): このモデルは **Baseline** > **Potential** > **Action** > **Result** で構成されており actor がターゲットをどのように認識し対応するかを表しているものである。静的な状態である **Baseline** では、actor はその領域を集散的に構成する “an array of entities”をコントロールしている。第 2 フェーズである **Potential** では、あるターゲットが “scope of potential interaction” (actor による潜在的相互作用の範囲) である “actor’s filed”に入る。この状態は緊張を生じさせる。なぜならば actor はそのターゲットをなんらかの方法で処理しなければならないからである。第 3 フェーズの **Action** における典型的な処理方法は、そのターゲットを actor のコントロール内に入れることである。そのアクションの結果として、最後の第 4 のフェーズ **Result** では再びより静的な状態に戻る。

- (21) **Assessment**: It is {unclear / *arguable / *uncertain / *unsure / *undecided} to me whether mosquitoes have souls. Langacker (2011:202)
- (22) **Inclination**: It {seems / appears / *is doubtful / *is likely / *is dubious} to me that she has enough money to buy Microsoft. Langacker (2011:202)
- (23) **Result**: It is {apparent / evident / obvious / *certain / *definite / *true / *undeniable} to me that Croatia is destined to be the world's next superpower. Langacker (2011:202)

各例文冒頭に記載してある **Formulation**等は“*The control cycle*” (epistemic control)を示している。(20-23)の例文に基づき、Impersonal It 文の特徴は、命題についての認識的判断の責任を特定の概念化者に負わせることなく文が成立するという点にある、と述べている。なぜならば、“to 句”の付加が可能な場合には常にその付加はオプションであり、“to 句”の付加は必須要素ではない。このことから、Impersonal It 文は“*a generalized conceptualizer*”を喚起し、この文が含意しているのは、命題を判断する立場に立つ人ならだれでも同じ評価(assessment)をするだろうということである。“to 句”が付加された場合にはそれが指しているのは常に話し手でありその命題に対する究極的判断の責任を負う立場にある。しかし、Impersonal It 文が示す“*a generalized conceptualizer*”とその話し手の立場は矛盾するものではなく、話し手も“*generalized conceptualizers*”の一人として示されていると説明している(p.202)。

この主張をさらに裏付ける例文として(24)が挙げられている。「少なくとも私には」、「私だけに」そして「私のみならず他者も」のいずれもが(24)に可能である。

- (24) It is apparent – {at least to me / if only to me / to me and doubtless to others} – that the president has been lying to us about his motivations. Langacker (2011:202)

これらのことから、Langacker (2011:202)は“.....these sentences [本論の(24)] both evoke a conceptualizer in generalized fashion and also situate the speaker with respect to this general viewpoint.”と述べている。従って、Impersonal It 文は一般的概念化者を喚起し、同時に話し手もこの一般的視点を持っていることを伝える文ということが主張されている。

3.2 Impersonal It 文と It 分裂文の関連性

It 分裂文の統語的特徴(本節内で後述・注 20 参照)と情報構造は Impersonal It 文とは異なる。しかし、本論では、二つの構文が共通して持つ Impersonal It が両構文を関連づけており、前節の Impersonal It 文の分析結果 — 一般的概念化者を表しうる — を It 分裂文に援用することが妥当であると考えている。本節ではそのように考えられる3つの根拠を示す。

第一に、本論の理論的枠組みにおいては、Impersonal It を持つ種々の構文は一つのスキーマから捉えられることが提唱されている。従って、Impersonal It 文の分析結果を It 分裂文にも援

用することは理論内整合性を持っていると考える。尚、下記文中の“his notion”は Bolinger を指している。

Importantly, his notion of ambience is not limited to the atmosphere or the physical surroundings, and meteorological expressions are seen as forming a gradation with other *it*-constructions. He posits an abstract meaning shared by all uses of *it*:
Langacker (1991 (II):365)

第二に、It 分裂文の歴史的なコーパスを分析している Ball(1994)は、IP It 分裂文の発達には他の構文の影響があると主張しており、「その他の構文」の中には Impersonal It 文も含まれている。

Ball(1994)は IP It-cleft は後期中期英語に始まり、“the convergence of several cleft and cleft-like copular constructions”、いくつかの分裂文そして分裂文に類似したコピュラ文の収斂から現れたと主張している。この主張は次の分析結果に基づくものである(p.623)。後期中期英語の 14 世紀に最初の IP It 分裂文が認められ、その文の焦点部分は副詞句/前置詞句である。この IP It 分裂文は二つの構文の“merger”であると考えられる。二つの構文とは“an old copular impersonal construction”と名詞句を焦点部分に持つ It 分裂文である。15 世紀には焦点部分に名詞句を持つ IP It 分裂文が現れているが、これを old SF It 分裂文からの発達と見る証拠はなく、むしろ、“the old inverted pseudo-cleft”と“the new AdvP/PP-focus *it*-cleft”の影響によるものであると見ている。なぜならば、古期英語時代から“the old inverted pseudo-cleft”は補部に新情報を許していたからである。このような発達の経緯から、Ball(1994)は IP It 分裂文は一つの源から発達したのではなく、類似構文である疑似分裂文、そして非人称構文から発達したものであると考えている。

従って、Ball(1994)の見解が妥当であるとする、It 分裂文の発達には非人称構文も関わっている可能性がある。そこから両構文の関連性が推測される。

第三に、現代英語においても It 分裂文と非人称構文(impersonal It 文)の形式は類似している。例えば、Patten(2012:4)は、(25-26)の例文を挙げ、“extraposed sentences” (Patten による名称)との形式的類似性をどのように説明すべきかと疑問を投げかけている。It 分裂文と外置文の表面的な違いは文末節にギャップがあるか否かの違いである²⁰。そして“Do *it*-clefts share

²⁰ Impersonal It 文(1-7)の It 節には be 動詞に加え一般動詞 も生起する。

- | | | |
|--------------------------------|---------------------------------------------------------------|--------------------------|
| (1) Type SVC: | It is a pleasure <i>to teach her</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (2) Type SVA: | It was on the news <i>that income tax is to be lowered</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (3) Type SV: | It doesn't matter <i>what you do</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (4) Type SVO: | It surprised me <i>to hear him say that</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (5) Type SVOC: | It makes her happy <i>to see others enjoying themselves</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (6) Type SV _{pass} : | It is said <i>that she slipped arsenic into his tea</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
| (7) Type SV _{pass} C: | It was considered impossible <i>for anyone to escape</i> . | Quirk et al. (1985:1392) |
- 一方、It 分裂文(8-9)の It 節には“be”動詞以外の動詞は現れないという違いがある。中村・金子編(2002:93)は It 分裂文について「分裂文の焦点に生じる要素には、原則として[-V]の範疇素性をもった要素(すなわち、NP, PP, 副詞句、副詞節)に限られる」と制限をまとめている。
- (8) *It's [AP very tall] that you are. 中村・金子編(2002:93)
 (9) *It's [VP answer the question] that Mary did. 中村・金子編(2002:93)

more than just an apparent likeness with this extraposed structure?”と、It 分裂文と外置文には形式的類似性以上に何か類似点はあるのだろうか、と、問うている(p.4)。

(25) It 分裂文 : *It was the Colonel [that __ survived]* Patten (2012:4)

(26) 外置文 : *It is a miracle [that he survived]* Patten (2012:4)

その類似性に言及しているのが、Collins (1991)である。コーパスから分裂文を分析しているCollins(1991) は、“It”が主語位置にあるという有標性が逆に本来は異なった構造を持つ It 分裂文と Impersonal It 文に共通性をもたらしているのではないかという見方を示している。Collins(1991:182/188-189)は、次の二点についてその理由の一部を二つの構文の構造的類似性に求めている。

第一点は、分裂文が書き言葉で用いられることが多い²¹という特徴についてである。Impersonal It 文の持つ非人間化の特徴とフォーマル度が形式の類似している It 分裂文にも影響を及ぼしており、それが書き言葉に適しているからではないかと述べている。

One further reason for the comparative popularity of clefts in writing may be their structural similarity to impersonal constructions (such as ‘It is said that...’, ‘It is true that...’), which imbues them with a depersonalized quality and a formality that is often out of place in informal spoken genres.

Collins (1991:182)

第二点目が It 分裂文のもつ “known- fact effect”である。Collins (1991:188-189)は、It 分裂文の既成事実化効果は It 分裂文の持つ It be 構造と他の “impersonal”構文(“it is said that..., it is well-known that..., it is arguable that...”)との構造的類似性にあるのではないかと指摘している。但し、残念ながらそれ以上の積極的な議論はない。

異なる構文間の影響性を認めないという立場もあるだろう。しかし、Taylor (2012) が主張しているように “a repository of memories of linguistic experience” (繰り返しによる言語経験による記憶) から形式が類似する要素との間に言語使用者が繋がりを見出し、その結果、二つの異なった構文間に相互の影響性が認められるという考えもある。

そして It 分裂文に対する Impersonal It 文の考えられる影響性の一つとして、Impersonal It 文の特徴であるその高い慣用性があると思われる。Quirk et al. (1985:1392) が “But it is worth emphasizing that for clausal subject (though cf 18:34) the postponed position is more usual than the canonical position before the verb (cf 10:26).”と述べているように、動名詞節を除く節主語の場合には基本的語順を持つ文より Impersonal It 文の方が一般的に用いられる。この高い使用基盤に基づく慣用性が Impersonal It 文と形式の類似性を持つ It 分裂文とを関連付けている可能性がある

認知文法における “be”動詞の解釈については Langacker (1991(D):323)を参照。

²¹ Collins (1991:181)は 10,000 語毎の It 分裂文/疑似分裂文の生起頻度を調べている。It 分裂文は書き言葉で 5.7、話し言葉で 4.3 と書き言葉の方の頻度が高い。一方、疑似分裂文の場合は話し言葉の方が高い頻度を示している。

ことが推測される。そしてこの二つの構文の関連現象は言語のみに特有ではない基本的・一般的認知現象である “entrenchment” (定着) (Langacker 2000b:64-65)によって支えられていると考えられる。この推測が検証を必要とするものであるのはもちろんであるが、異なる構文間の影響性を否定しないという立場に立つことにより、説明できる事象は多くなるのではないかと考える。

これらのことから、Impersonal It 文と It 分裂文には関連性が見られ、Impersonal It 文の It の分析結果を It 分裂文に援用することは十分に有意義であると考えられる。

3.3 “It”の指示領域と It 分裂文の概念化者

Patten (2012)、Hedberg (2000)そして、Gundel, Hedberg & Zacharski (2001)は “It”の定性質に注目しているが、“It”の定性質には別の側面がある。それは(人称)代名詞全般に見られる指示領域(delimitation)に幅があるという特徴を “It”も持っていることである。

Langacker (2011)は特定の指示物を指示する “It”が “ambient it”へと姿を変えていく過程を様々な角度から説明しているが、その論証の一つが複数代名詞(we, you, they)の “impersonal use” である。これらの代名詞は高度に範囲が限定されたグループを指示することもできれば、不定なサイズを指示することもできる。例えば、(27)の “We”は前者であり、“We”で表されている概念化者は対話者間の関係に限定され、一方、(28)の “We”は後者であり、それが表している概念化者は対話者間の領域を超えていると解釈することができる。

(27) We just had a nice one-on-one conversation. Langacker (2011:194)

(28) We are not alone. [i.e., there is other intelligent life in the universe.] Langacker (2011:194)

同じ説明が “It”にも有効であると考えられる。指示語としての “It”の指示可能な範囲も非常に限定されているケースと範囲が取り払われているケースがある。例えば前者は(29)のように対話者の眼前にある指示物を指示する場合である。“It”の指示物は対話者にのみ理解されており、この場合の指示領域は対話者間に限定されている。

(29) A: What is it?

B: It's my new PC. I bought it yesterday.

同様に、SF It 分裂文(6)においては、「私がなくしたのもの」があることは対話者間のみで了解されている事柄であり、指示領域は対話者間に限定されている。

(6) It's my key that I lost. Lambrecht (1994:70)

一方、“It”の指示領域が不定である例として(30)が挙げられる。Kamio & Thomas (1998:296)は(30)の“it”と“that”の指示の違いを“it”の“wide reference”(指示拡散性)と“that”の“narrow reference”(指示集中性)から説明している²²。

(30) Sonja was born out of wedlock but I never revealed it to her / that to her}.

Kamio & Thomas (1998:296)

“that”は単に Sonja が誕生のときに両親が結婚していなかったことのみを指示している。しかし“it”は関連する facts や events を指す。関連する事柄の一例として、“that Sonja was born illegitimately, and the whole story of her mother’s disastrous affairs with the Prime Minister, the dangerous internal intrigue which resulted from it”が挙げられている。関連する事柄には明確な範囲の指定は見られない。

そしてこの“it”の指示拡散性質を明白に示しているのが高橋(2004:26)による下記の会話(31)である。

(31) Steve: Kate, will you marry me? We were made for each other.

Kate: *That’s** *It’s* quite a line, Steve. You mean fate brought us together?

Steve: *That’s** *It’s* exactly what I mean. We are the perfect couple.

Kate: We’ve had a few nice dates. But marriage is a big commitment.

Steve: Sure *it** *that* is. But I’m ready to take the plunge.

高橋(2004:26) 下線は筆者による

この会話の Steve の最後のせりふ“Sure it is.”(もちそん、そうさ)は Kate の“*But marriage is a big commitment.*”(結婚って色んな責任があるわ、だから結婚って重大なことよ)を受けたものである。この“a big commitment”は世間一般で考えられている結婚に伴う様々な責任事項を指しており、“it”は Kate と Steve の特定の二者領域を超え、不特定な世間一般で共有されている諸知識、つまり結婚に関する百科事典的知識の領域にまで広がっていると解釈できる。

上述した事象は“It”の指示領域が特定領域から一般的領域までの広がりを持つことを示していると考えられる。そしてこの広がりには別のアングルにも見ることができる。その一つが(32)の“It”である。(32)は話し手と聞き手が了解している場所で「雨が降っている」ことを伝えている。

²² Kamio & Thomas (1998)は、“it”と“that”の違いについて次のようにも述べている。“It”は話し手にとって処理済の(中心)情報であり、“that”は話し手にとって処理中の(周辺の)情報である。Gundel, et al (1993)が聞き手からの接近可能性という観点から指示詞の情報性質を説明しているのに対し、Kamio & Thomas (1998)は話し手の視点にたつ説明である。

(32) It's raining.

Langacker (2008:390)

(32)の“it”について、Langacker (1991(II):365)は“setting”という用語を用いて次のように述べている。Bolingerによる“it”の説明-“ambience”または“all-encompassing environment”-はまさに正しい方向を示しており、“the ‘ambient’ sense of *it* designates an abstract setting.”と付け加えるのみである。さらに、Langacker (2000a:42)でも“I would argue, for instance, that the so-called ‘dummy’ or ‘expletive’ *it* represents an abstract, maximally schematic setting.”と説明している。

そして、興味深いことに、Langackerによる“setting”指示説明と“Discontinuous”タイプIP It分裂文の“setting”の働きとが符号する。Collins (1991:166-167)はコーパスでの分析結果から典型的“Type 3 clefts”(Discontinuous IP It分裂文を指す)の特徴を次のように述べている。

(33) “Type 3 clefts” Collins (1991:166-167)よりの抜粋 下線は筆者による

(a) Type 3 clefts typically have a circumstantial adjunct or adjuncts as highlighted element, and the bulk of the propositional content in the relative clause. Collins (1991:166)

(b) With their capacity to imbue information, even though freshly communicative, with a character of non-controversiality they give the impression that the listener/reader is simply being ‘put in the picture’, or ‘brought up to date’ with information to which others will already be privy.

Collins (1991:166)

(c) Type 3 clefts either occur discourse-initially or stage-initially, or have the potential to be so distributed.

Collins (1991:166)

典型的Discontinuous IP It分裂文は談話冒頭に用いられ、そのIt節では状況設定をする内容が述べられている。そして、Collins (1991:167)は“……has the rhetorical effect of imbuing it with a non-controversial character. As a result the reader is made to feel that s/he is being made privy to a generally known piece of information.”と述べており、場面設定語句がIt節にあることにより、そのレトリック効果から既成事実効果が生まれていると考えている。

安井(1978:87)は、分裂代名詞節で述べられる内容は「特別に強調され、目立つように仕組まれたテーマ」であると述べている。その目立つように仕組まれている状況設定表現の多くは通常、受動態の主語にならないことから(“Tom walked in the park.”の能動文に対して“The park was walked in by Tom.”は通常容認度が低い)、これらは働きかけられる対象ではない。従って、変化するものと捉えにくい、所謂“imperfective”性質を持っていると考えられる。そこから、“setting”は話し手個人の何らかの働きかけの対象とはなり難しく、個人の領域を超えたものであると聞き手には受け取られるのであろう²³。

²³ Delin & Oberlander (1995)は、It分裂文を“topic-clause”タイプ(Prince 1978のSF It分裂文に相当)と、

そして、“It”の指示領域はさらに異なったアングルへも広がっている。(34)では具体的な空間・時間領域ではなく、意識領域が示されており、Langacker は“it”はその後に続く概念内容のベースとなる “scope of awareness” (意識のスコープ) を表していると説明している。そして (22) が示しているように、“to me”の付加は必須要素ではなく、オプションである。つまり、話し手個人の特定領域から不定領域への広がりが可能である。

(34) It seems that he lied to us. Langacker (2008:390)

(22) It {seems / appears / *is doubtful / *is likely / * dubious} to me that she has enough money to buy Microsoft. Langacker (2011:202)

同様に、It 分裂文にも意識スコープを見ることができる。(35)はその一例と考えられ、“It”の指示領域は喜びそして名誉という意識の世界である。発話者個人による喜びそして名誉という意識はもはやあたかもそこにいる全員の意識を代表しているかのようなものである。慣用表現化されている(35)は、聞き手からの拍手によって応えられるものと想定して発話され、また多くの場合、そうであると推測できるだろう。

(35) It's with great honor and pleasure that I announce Hilary Putnam. Prince (1978:902)

このように“It”の指示領域は様々な角度において対話者間の特定領域から不特定の世間一般領域に広がりを示している。指示領域が異なることはその領域に存在している概念化者の立ち位置が異なっていることを示している。対話者間の特定領域の場合には概念化者は「聞き手」に対峙する特定の「話し手」としての位置づけであり、不特定の世間一般領域の場合には「世間一般の人」としての自分の姿を示しているということになる。

そしてこの “It”の指示領域は It 分裂文における概念化者の立ち位置と呼応していると考えられる。この概念化者の立ち位置の違い、姿の提示の違いという考え方は、まさに、Lambrecht (1994:71)による「SF It 分裂文においてはこの *that*-clause は対話者間の “common ground” (共通領域) に属し、IP It 分裂文の場合にはその “common ground”は話し手と第三者に属しており、聞き手はたまたま未だその第三者に含まれていないだけである」という考え方を説明できるのではないだろうか。 IP It 分裂文が、一般的概念化者を喚起し、同時に話し手もこの一般的視点を持っていることを伝えると捉えることにより、この文の「既成事実効果」を説明することができ、さらに、「世間一般の人々の一人」としての概念化者を示すことにより「個人的責任回避機能」も示すことができる。

“comment-clause” (同じく IP It 分裂文に相当)に分けており、既成事実化効果は “comment-clause clefts” タイプのみに見られると主張している(p.492)。そして、この効果を “state” と “event” のアスペクト効果から説明しており、分裂節は “state-markers” として働き、事柄を “state” として示すことによりもたらされるとしているという興味深い意見を示している。

このような It の指示領域の広さ、そこからの概念化者の多様な姿から It 分裂文を見ると、It 分裂文にはおおよそ表(2)のような連続体が見えてくると考える。尚、表(2)は典型的な用法と考えられる(a)から(d)を示してはいるが、これは厳密な区切りまた分類を示しているものではなく、概念化者の姿が特定の概念化者から一般的概念化者の連続体を成していることを提案しているものである。

表2 It 分裂文の概念化者の姿の連続性

	It 分裂文の情報構造	例文・特徴	概念化者
(a)	SF It 分裂文 It 節に新情報+that 節に既知情報を持つ It 分裂文	(4) It was his keys that he lost. (前提情報が必要なタイプ・that 節は省略されることが多い)	the particular conceptualizer 連
(b)	IP It 分裂文 It 節に既知情報+that 節に新情報を持つ It 分裂文	(17) It is through these conquests that the peasantry became absorbed into a single form of dependent lord-tenant relationship. (前提情報が必要で、既成事実化効果/個人的責任回避効果が顕著なタイプ)	続 体 a generalized conceptualizer
(c)	IP It 分裂文 Discontinuous It-cleft It 節に新情報+that 節に新情報を持つ It 分裂文	(3) It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend. (談話冒頭タイプ) (前提情報は無いが、既成事実化効果/個人的責任回避が顕著なタイプ)	
(d)	IP It 分裂文 Discontinuous It-cleft It 節に新情報+that 節に新情報を持つ It 分裂文	(35) It's with great honor and pleasure that I announce Hilary Putnam. (慣用表現タイプ)	

- (a) (4) “It is his keys that he lost.” : It 節に新情報・主張部分そして that 節に既知情報・前提部分を持つ典型的な SF It 分裂文。この分裂文の that 節には会話を前に進める“communicative dynamism”の働きが非常に低いことから that 節が無い場合があると、Prince(1978:896-897)は述べている。従って、“It is my keys.”のみでも発話可能なことから、“It”の具体的指示性は高くかつ指示領域は対話者間に限られている。そこから、話し手は対話者としての特定の概念化者の姿を明示的に示していると考えられる。

- (b) (17) “It is through these conquests that the peasantry became absorbed into a single form of dependent lord-tenant relationship.”: It 節に既知情報そして that 節に新情報を持つ IP It 分裂文。(ただし、It 節の “through” の部分は既知情報ではないことから、話し手の主張も含まれていると考えられる。) It 節内のほとんどの情報は対話者間で共有されているものであることから、特定の概念化者が存在していることを示している。従って、“It” の指示領域は対話者間が中心となっているものと考えられる。しかし、Prince (1978:900) は、このタイプの IP It 分裂文には弱責任性・既成事実効果があり、そのことにより説得に適していると述べている。そこから “It” の指示領域は対話者間に留まるものではなくそれを超えた広さを示しているのではないかと考えられる。概念化者の特定性提示が(a)より薄くなっており、一般的概念化者としての姿も見せていると思われる。
- (c) (3) “It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend.”: 新情報のみで構成されている IP It 分裂文は講演等の冒頭に多く用いられる。この Discontinuous It-cleft タイプの IP It 分裂文が伝える情報は話し手のみが持っている情報というより「話し手と第三者が共通して持っている情報であり、聞き手はたまたまそれに含まれていないとして示されているもの」との解釈効果がある。“It” の指示領域は対話者間にとどまらず、一般的世間にまで広がっており、聞き手を除く全員が概念化者として示されているという考え方が可能である。そこから概念化者も一般的概念化者の一人としての姿が示されていると考えられ、話し手の個人的責任を回避できることになる。
- (d) (35) “It’s with great honor and pleasure that I announce Hilary Putnam.”: (c) と同様に、新情報のみで構成されている IP It 分裂文であり、慣用化されている表現である。Prince (1978:902) はこの種の IP It 分裂文はデータに非常に頻繁に見受けられ、そしてこの文には “deference/politeness” という下位機能があると述べている。またこの文の話し手の姿について Prince (1978:903) は、“..... we again find the speaker playing down his own role in the event,” とも述べている。話し手個人の姿が薄れていることから、この文には Hilary Putnam の登場が喜ばしいのは話し手のみならずおそらくそこに臨席している人々全てであるとして Hilary Putnam を紹介する効果が考えられる。従って話し手は自身を聞き手をも含む全員の一員として示していることにはないだろうか。そこから、“It” の指示領域は(c)より広がっていると考えられる。この文では、発話に対する責任は全員のものとも捉えることができると思われる。

上述のように It 分裂文の概念化者の姿は特定の概念化者から一般的概念化者の連続体を成しているのではないかと、そしてその連続体が IP It 分裂文が伝えることができる「既成事実効果」と「個人的責任回避機能」に寄与している可能性があると考えられる。

4. 結論

概念化者は異なる言語形式を用いることにより、どのように事柄の *construal* を示すかそして概念化者自身をどのように提示するかを選択を持っている。本論では、この概念化者の姿と It 分裂文の “It” の指示領域の幅に焦点を当てることによって IP It 分裂文の「既成事実効果」と「個人的責任回避機能」についての説明を試みた。分析結果は次の通りである。

2 節では、既成事実効果について SF It 分裂文の影響、そして It 分裂文の持つ「定性質」に焦点を当てた先行研究を概観した。これらの見方には同意する点もあるものの、そのみではその事実がなぜ周知と受け止められるのか、さらに話し手の個人的責任がなぜ回避できるのか等 SF It 分裂文との違いを十分に説明できないという疑問を示した。

これらの疑問点について 3 節では、It 分裂文を概念化者の姿という観点から説明を試みた。議論に先立ち、3.1 節では Langacker(2011)の Impersonal It 文分析に基づく提案 —It 構文は一般的概念化者としての話し手の姿を示すことができる— をあげた。そして 3.2 節ではこの分析結果を It 分裂文に援用できる妥当性について述べた：①認知文法における構文の考え方、②It 分裂文の発達に Impersonal It 文が関与している可能性、③両構文の形式の類似性を取り上げた。

3.3 節では、代名詞 “It” の指示領域が対話者間に限定されている特定領域から、不特定の世間一般で言われている諸知識の領域まで広がっていること、そしてその広がり、時・空間領域そして意識領域までおよぶことを示した。これらの種々の指示領域の中にはその領域内に自身を置いている概念化者の姿が見られ、このような “It” の異なる指示領域は It 分裂文における概念化者の立ち位置と呼応しているという意見を述べた。そして、It 分裂文には概念化者が特定のであることを明示的に示しているケースから概念化者の姿を低め一般化して提示しているケースまでの連続体が見られるという試案を示した。この試案により、IP It 分裂文が一般的概念化者を喚起し、同時に話し手もこの一般的視点を持っていることを伝えることができることを説明できる可能性があることを述べた。一般的概念化者として事柄を述べることにより「既成事実効果」が生まれ、さらに、話し手の「個人的責任回避機能」をも可能になるという提案である。

以上の分析結果から、本論では、Impersonal It がその意味の一つとして “a generalized conceptualizer” を含意することができ、それが IP It 分裂文の特徴と言われている「既成事実効果」及び「個人的責任回避機能」に寄与しているのではないかという試案を示した。

参考文献

- Ball, Catherine N. (1994) "The origins of the informative-presupposition *it*-cleft." *Journal of Pragmatics* 22. pp.603-628.
- Borkin, Ann (1984) *Problems in Form and Function*. New Jersey: Alex Publishing Corporation.
- ボリンジャー, D. (1981) 中右実 (訳) 『意味と形』東京: こびあん書房.
- Collins, Peter C. (1991) *Cleft and Pseudo-cleft Constructions in English*. London/New York: Routledge.
- Declerck, Renaat (1984) "The pragmatics of *IT*-clefts and *WH*-clefts." *Lingua* 64. North-Holland: Elsevier Science Publishers B.V. pp.251-289.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*. Leuven-Louvain: Leuven University Press.
- Delin, Judy (1992) "Properties of *it*-cleft presuppositions." *Journal of Semantics* 9. pp.289-306.
- Delin, Judy and Jon Oberlander (1995) "Syntactic constraints on discourse structure: the case of *it*-clefts." *Linguistics* 33. pp.465-500.
- Gundel, J. K., N. Hedberg, and R. Zacharski (1993) "Cognitive status and the form of referring expressions in discourse." *Language*, Volume 69, Number 2. pp.274-307.
- Gundel, J. K., N. Hedberg, and R. Zacharski (2001) "Definite descriptions and cognitive status in English: why accommodation is unnecessary." *English Language and Linguistics* 5.2: Cambridge University Press. pp.273-295.
- Hedberg, Nancy (2000) "The Referential Status of Clefts." *Language*, Volume 76, Number 5. pp.891-920.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas (1998) "Some Referential Properties of English *It* and *That*." In: Akio Kamio & Ken-ichi Takami (eds.) *Function and Structure in honor of Susumu Kuno*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 289-315.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2001) "A framework for the analysis of cleft constructions." *Linguistics* 39-3. pp.463-516.
- Langacker, R.W. (1991(I/II)) *Foundations of Cognitive Grammar* Volume I/II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R.W. (2000a) *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R.W. (2000b) 坪井栄治郎 (訳) 「動的使用依拠モデル」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』東京: ひつじ書房. pp.61-143.

- Langacker, R. W. (2005) “Construction Grammars: cognitive, radical, and less so.” In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibanez and M. Sandra Pena Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp.101-159.
- Langacker, R. W. (2007) “Constructing the meanings of personal pronouns.” In: Radden Günter, Klaus-Michael Köpcke, Thomas Berg and Peter Siemund (eds.) *Aspects of Meaning Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.171-187.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive Grammar A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, R.W. (2011) “On the subject of impersonals.” In: Brdar, Mario, Stefan Th. Gries and Milena Žic Fuchs (eds.) *Cognitive Linguistics Convergence and Expansion*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp.179-217.
- 中村捷・金子義明 (2002) 『英語の主要構文』 東京：研究社.
- Patten, Amanda L. (2012) *The English It-Cleft*. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Prince, Ellen F. (1978) “A Comparison of WH-Clefts and IT-Clefts in Discourse.” *Language*, Volume 54, Number 4. pp.883-906.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- 高橋英光 (2004) 「第2章 指示語の理解：英語の it と that」大堀壽夫（編）『認知コミュニケーション論』東京：大修館書店.
- 安井稔 (1978) 『新しい聞き手の文法』東京：大修館書店.
- 安井稔（編）(1987) 『現代英文法辞典』東京：大修館書店.
- 湯本久美子 (2013) 「"Impersonal It 文”の a generalized conceptualizer」『東京大学言語学論集』第34号.東京大学,pp. 247-273.

“A known-fact Effect” and “a Responsibility-weakening Function” in the *It*-Cleft Constructions

Kumiko Yumoto

yumoto@luce.aoyama.ac.jp

Keywords: *It*-cleft, Known-fact effect, Responsibility-weakening function

Delimitation of *It*, A generalized conceptualizer, Impersonal *It* constructions

Abstract

This paper analyzes “a known-fact effect” and “a responsibility-weakening function” in the informative-presupposition *It*-cleft constructions in the frame of Cognitive Grammar (Langacker 2011), which claims that *It* is meaningful and referential. As is proposed by Langacker (2011), impersonal *It* profiles the conceptualizer’s field of view and his/her scope of awareness. I will show that the “delimitation” of the scope of impersonal *It* ranges from specific to vague as does *It* used as a pronoun and that the varied “delimitation” corresponds to various mental states within the conceptualizer, ranging from specific to generalized. Thus, I will propose that the *It*-cleft constructions show the continuum between a specific conceptualizer to a generalized conceptualizer and that it is the generalized conceptualizer that contributes to the known-fact effect and the responsibility-weakening function.

(ゆもと・くみこ 青山学院女子短期大学)